山梨医大紀要　第17巻，84～90（2000）

老人看護学実習におけるオムツ体験学習の学びの分析

小林陽子

老人看護学実習において，排泄援助が必要な老人に対する身体的，心理的理解が深まることを期待して，実習にオムツ体験学習を組み込み実施した。オムツ体験学習の学びが実習の援助過程にどのように影響するのかを明らかにする目的で，学生25名のレポートより分析し，検討した。その結果，オムツ体験学習での学びと実習での学びとで関連した内容のあった学生は14名で，その関係は５パターンに分類された。体験学習での学びと実習での学びとの関連は，オムツ体験学習の実施時期と実習での受持ちケースの特性に影響を受けること，及び体験学習での学びを援助過程に反映させるためには教員の意図的な介入が必要であることが示唆された。

キーワード：老人看護学，実習，体験学習

1　はじめに

老人看護教育においては，学生に老人の理解をいかに進めるかということが課題であり，老人看護学実習では，一対象者への看護援助展開をとおして対象老人のより深い理解につながるようにとプログラムを組んでいる。しかし，対象理解を促進する具体的指導方法については模索中のところである。加齢や疾病により身体機能の低下した老人，特に痴呆を有する老人の場合は，日常生活全般に援助が必要となるが，排泄面では運動機能の低下や尿意便意の消失，適切な排泄行動がとれないといったことなどからオムツ着用に至ることが多い。そしてそのオムツ交換は援助者に委ねられており，施設等では人員不足から個々の排泄状況に即していない，定時のオムツ交換が一般的というのが現状である。排泄援助に関してはとりわけ対象老人の自尊心に留意した援助が求められるが，適切に感情を表現できない痴呆性老人の思いをいかに理解し援助につなげていくかということは大きな課題である。看護教育においては対象をより深く理解することを目的として体験学習が試みられ，その有用性が報告されている[1)～6)]。今回，施設で生活し，排泄援助を必要とする老人の身体的，心理的理解を深める目的でオムツ体験学習を実習に組み込み実施した。本研究では，オムツ体験学習の学びが実習での学びにどのような影響を与えているのかを明らかにし，効果的な教育方法を追求することを目的とする。

2　方法

1）実習の構成と方法

実習は，３週間（135時間）で構成し，表１のとおりである。実習の場は，介護老人保健施設と療養型病床をもつ一般病院で，教員が事前に現場スタッフと相談の上，受持ちケースの選定をしている（表２）。学生はいずれかの実習場所で，初日に受持ちケースを１名ずつ決め，10日間を受持ちケースへの看護展開にあてている。教員１人当り，５～６名の学生を担当し，期間中は，両施設に１名ずつ教員が入り指導にあたる。

実習中，受持ちケースへの援助展開についての記録として課しているものは，主に実習記録Ｉとケースレポートである。実習記録Ｉは，「患者に関する情報」「行動計画」「実施したケア」「患者の反応・ケアの結果」「ケアの評価」「一日の感想」の６項目についての記述欄をもつ，Ａ４サイズ１枚の記録用紙である。実習１日につき，１枚対応し，学生は当日の朝と翌日に教員に提示することになっている。教員は，その記録から学生の一日の援助計画を確認し，さらに翌日，援助の結果，学び，感想などを確認し，学生指導に利用している。ケースレポートは，10日間の受持ちケースへの看護の展開，援助の評価及び，学生の最終的な学びについて記述されるものである。形式，枚数は規定していないが，事例紹介，看護計画，看護展開，看護援助の評価，考察を含めるよう指示している。内容については，学生の関心事に焦点が絞られる傾向がある。実習の最終日に提出することを課している。

2）オムツ体験学習の方法

実習初日の学内オリエンテーション時に，課題の説明

表１　実習日程表

第１週							第２週							第３週				
月	火	水	木	金	土	日	月	火	水	木	金	土	日	月	火	水	木	金
0	1	2	3	4	5		6	7	8	9	10	11		12	13	14		
学内オリエンテーション	施設内実習		（中間カンファレンス）				施設内実習		自主学習	施設内実習				施設内実習	（最終カンファレンス）	自主学習 レポート作成		学内まとめ　レポート提出

＊施設内実習の時間は，午前８時30分から午後４時30分である
＊曜日欄の下の数字は，表３，表４，本文中の実習記録Ｉ記述時期，オムツ体験実施時期に対応する

表２　受持ちケースの概要

	年齢	性別	痴呆	排泄方法	尿意便意の有無	移動	その他
A	92	女	有り	オムツ使用　全介助	はっきりしない	移動全介助	臀部を中心に掻痒感あり
B	90	女	有り	オムツ使用　全介助	訴えるときもあるが はっきりしない	移動全介助	臀部を中心に掻痒感あり
C	82	女	有り	オムツ使用　全介助	はっきりしている時と そうでない時がある	移動全介助	
D	95	女	有り	オムツ使用　全介助	はっきりしない	移動全介助	臀部を中心に掻痒感強い
				日中メッシュパンツ＋パット2枚 ポータブルトイレ誘導1回 夜間オムツ使用　全介助	感じているようだが 上手く表出できない	移動全介助	
E	91	男	有り	リハビリパンツ使用 定時にトイレ誘導するがほとんど失禁　一部介助	訴えほとんどなし	歩行可	
F	91	女	有り	リハビリパンツ使用 定時に車椅子でトイレ誘導しトイレで排泄 時々パット失禁有り　一部介助	訴え無し	立位可	
G	84	女	有り	膀胱カテーテル留置中 日中パットのみ 夜間オムツ使用　全介助	無し	立位可	
H	75	女	有り	日中パットのみ、トイレ歩行 夜間リハビリパンツ、ポータブルトイレ　一部介助	有り	歩行可	

＊年齢は平成12年4月1日時点でのもの
＊Eは,実習期間途中で排泄方法に変更があった

表３　オムツ体験学習の実施時期と実習での学びとの関連　（学生数：人）

		オムツ体験学習での学びと実習での学びとの関連						計
		関連する内容のあった学生（人）					関連する内容のなかった学生（人）	
		パターン1	パターン2	パターン3	パターン4	パターン5		
オムツ体験学習実施時期	実習初日（０）						2	2
	実習第一週（１～5）			2			0	2
	実習第二週（6～11）	1	2		5		5	13
	実習第三週（12）						1	1
	実習終了後（13～14）	1				3	3	7
計		2	2	2	5	3	11	25

＊（　）内の数字は，表１実習日程表の数字に対応する

及び紙オムツ（介護パンツタイプ）１枚を配布する。学生への指示内容は，学習の目的即ち，実習での受持ちケースはオムツ使用者がほとんどであり，その対象をより理解すること，を説明し，実施時期は実習のできるだけ早い時期とし，紙オムツを当てて実際に排泄してみることを勧めているが，日時，場所，状況等についての指定はしていない。学生のレポートは，「いつ，どこで体験したか」「意見，感想，学んだこと」についての記述欄を設けたＡ４サイズ１枚の記録用紙を使用させ，実習最終日に提出させる。

３）研究対象

老人看護学実習を介護老人保健施設で平成11年11月８日から平成12年１月28日の間に実施した３年次生３グループ15名，同じく平成12年５月８日から６月16日の間に実施した４年次生２グループ10名，計25名。

４）分析方法

対象学生が記述した実習記録Ｉ，ケースレポート，オムツ体験レポートを分析に用いた。

(1) 実習の記録より

①実習記録Ｉより，排泄及び排泄援助に関する記述を抽出する。（ア）

ここでの「排泄及び排泄援助に関する記述」とは，対象理解に関する記述，排泄の問題認識に関する記述，排泄の看護ニーズの認識に関する記述，排泄に関する援助展開（計画，実施，評価）の記述である。

②ケースレポートより，排泄及び排泄援助に関する記

述を抽出する。（イ）

(2) オムツ体験レポートより，学びに関する記述を抽出する。（ウ）

ここでの「学びに関する記述」とは，対象理解に関する記述，オムツ排泄の問題認識に関する記述，看護ニーズの認識に関する記述である。

(3) 各学生単位で，実習の記述の抽出（ア，イ）とオムツ体験学習の記述の抽出（ウ）とについて関連する内容があるかどうかを検討する。

(4)（ア，イ）と（ウ）間において関連する記述があったものについて，各記述を抽象化した表現にまとめる。抽象化の内容は，１名の老人看護学の研究者から適切に表現されているかを点検してもらい，共通の見解が得られるまで行った。

(5)（4）について，（ア）の記述時期，（ウ）の実施時期から実習経過を加味し，（ア，イ）と（ウ）間での関係をみる。

本研究において，（ア）及び（イ）を実習での排泄援助に関する学び，（ウ）をオムツ体験学習での学びとする。

3　結果

オムツ体験学習での学びと実習での排泄援助に関する学びとで関連する内容があった学生は14人であった。

オムツ体験学習の実施時期は，表３のとおりである。

二種類の学びの関係について整理すると，以下の5つのパターンに分類された。

表４－１　　パターン１

受持ちケースの言動から思いを察知 → 追体験により受持ちケースの思いを理解

学生	受持ちケース	実習での排泄援助に関する学び 実習記録Ｉより（記述時期）	オムツ体験での学び（実施時期）
1	A	オムツ交換時の表情から，羞恥心，不快感を知る。(3)	羞恥心，自尊心をそがれる苦痛を理解する。(13)
2	F	排泄時のしぐさから，羞恥心に気付く。羞恥心への配慮の必要性を認識する。(6)	他人にオムツ交換される羞恥心は大きいことを理解する。(11)

表４－２　　パターン２

受持ちケースの言動から思いを察知 → 追体験により受持ちケースの思いを理解　看護ニーズを認識

学生	受持ちケース	実習での排泄援助に関する学び 実習記録Ｉより（記述時期）	オムツ体験での学び（実施時期）
3	E	オムツ排泄後の表情より，不快感に気付く。(4)	オムツ排泄の不快感を理解する。 個々の排泄状況に合っていない，現状での定時交換は問題と認識する。 適時交換の必要性を認識する。(10)
4	H	受持ちケースの言動から，オムツ排泄への抵抗，苦痛を知る。(3)	オムツ排泄の違和感，不快感を理解する。 相手の立場にたった援助の必要性を認識する。(11)

1）パターン１「受持ちケースの言動から思いを察知し，オムツ体験での追体験によりその思いを理解」２例（表４－１）

２例共に，受持ちケースの排泄介助時の険しい表情や陰部を隠そうとするしぐさから，羞恥心や不快感を察知している。その後のオムツ体験で自らも羞恥心や不快感を実感し，あらためて受持ちケースの思いの理解に至っている。

2）パターン２「受持ちケースの言動から察知した思いを，オムツ体験での追体験により理解し，さらに看護ニーズを認識する」２例（表４－２）

学生３は，受持ちケースの不快な表情を見て，その後オムツへの排泄があったことを知り，排泄時の不快に気付く。オムツ体験でオムツ排泄の不快感を実感し，受持ちケースの思いの理解に至っている。さらに，実習現場での定時交換が入所者個々の排泄状況に合っていないことが問題であること，個々の排泄にあわせた適時交換が必要であることの認識に至っている。学生４は，普段はトイレ排泄している受持ちケースが，処置のためオムツ排泄を強いられた時に「オムツでするのは気持ちが悪いから嫌だ」と抵抗した場面を取り上げ，オムツ排泄に対する抵抗や苦痛を知り，さらに自身のオムツ体験からその苦痛の理解に至っている。そして，オムツをしているから排泄は大丈夫という意識ではなく，相手の立場にたった援助をしていくことが必要であると記述している。

3）パターン３「オムツ体験での追体験により，受持ちケースの思いを理解し，看護ニーズを認識する。そして実習で受持ちケースへの援助展開につなげている」２例（表４－３）

学生５は，オムツ体験により排泄後の不快感が大きい

表４－３　　パターン３

追体験により受持ちケースの思いを理解　看護ニーズを認識 → 援助を展開

学生	受持ちケース	オムツ体験での学び（実施時期）	実習での排泄援助に関する学び 実習記録Ｉより（記述時期）	ケースレポートより
5	C	オムツ排泄後の不快感を実感する。 適時交換の必要性を認識する。(4)	便意を訴える言葉をきく。 尿意便意の有無を確認していく。(6) 尿意便意残存していると判断する。 排尿感覚維持のため，尿意便意の確認，声かけを続ける。(10)	尿意の訴えを促し，適時交換に努め，不快感軽減，感覚維持につなげる。
6	E	受持ちケースの立場にたって不快感を理解する。 痴呆の進行を招くという問題を認識する。　(4)	定時以外にも，トイレ誘導する。失禁あり。(7) 定時以外にトイレ誘導し，トイレ排泄に成功する。(9) 尿意を探り，トイレ排泄に成功する。 精神面にも良い影響と評価する。(10)	

ことを実感し，排泄後の早期交換の必要性を認識した。オムツを使用している受持ちケースに対して，尿意便意の有無を確認し，それが残存していると判断した後は，尿意を訴えるようにと働きかけ，排泄時に即オムツ交換し，不快感を軽減する援助を展開した。学生６は，オムツ体験で自身が感じた不快感を実習での受持ちケースの立場にたって理解している。その不快な状況により老人が意欲をそがれ痴呆も悪化するのではないかと，問題認識している。その後実習において，現場で決められた時間以外にもトイレ誘導し，トイレで排泄できるようにと援助を展開する。トイレ排泄は２回成功し，精神面にも良い影響があるのではないかと評価している。

４）パターン４「受持ちケースの状況，言動から看護ニーズを認識し，援助を展開する。オムツ体験での追体験により，受持ちケースの思いを理解し，看護ニーズを再認識，それを援助につなげる」５例（表４－４）

学生７は，受持ちケースの臀部を掻く動作から掻痒感があることに気付く。さらにオムツによる蒸れの問題にも気付き，清潔ケアを実施する。オムツ体験により掻痒感を実感し，受持ちケースの掻きたくなる思いを深く理解した。その後も掻痒感に対する援助を継続していく。学生８は，普段は車椅子上であまり動かない受持ちケースの，臀部を気にするしぐさに気付き，排泄時の不快感を察知する。表情やしぐさから排泄サインをとらえることで，適時交換ができるとし，排泄サインをキャッチするよう努めた。オムツ体験により不快感を理解し，現状での定時交換は問題であると認識し，適時交換につなげる援助を継続する。学生９は，受持ちケースの臀部を掻く動作や失禁により蒸れている状況から掻痒感があり，それに対する援助の必要性を認識し，具体的に清潔ケアやポータブルトイレ排泄を促す援助を展開する。オムツ体験により，不快感を理解し，清潔ケアの必要性を再認識する。さらにオムツ排泄の慣れはトイレ排泄への意識を失わせるという問題も再認識し，尿意便意をつかみポータブル排泄を成功させる援助を継続して展開していった。学生10は，受持ちケースが臀部を掻く動作から，オムツによる蒸れや掻痒感に気付く。また，陰部近くに手を動かすしぐさや，便臭があっても，気付かずに放置してしまったことを反省し，排泄のサインを探っていった。オムツ体験により，自身が感じた不快感を受持ちケースの状況を想像して考え，その不快感が大きいことを理解。現状での定時交換は問題であると再認識し，便意を訴えない受持ちケースの排泄サインをつかむよう努めた。学生11は，受持ちケースの身体状況から清潔保持，感染予防の必要性を認識し，清潔ケアを実施する。オムツ体験により，排泄後の不快感や蒸れを実感し，清潔ケアの必要性を再認識し，その後の実習でも継続する。

５）パターン５「受持ちケースの状況や言動から看護ニーズを認識し，援助を展開。オムツ体験での追体験により，受持ちケースの思いを理解し，さらに新たな看護ニーズを認識する」３例（表４－５）

学生12は，受持ちケースが，臀部を掻く動作から掻痒感に気付き，掻痒感に対する援助を展開する。また，オムツ交換時に「自分でしたい」という受持ちケースの言葉をきき，他者に介助されることの思いを知る。オムツ体験により，その掻痒感や「自分でしたい」という言葉の意味がようやく真に理解できたと記述している。実習中，個々の排泄に対応していない定時交換に対して，戸惑い

表４－４　パターン４

受持ちケースの状況，言動から看護ニーズを認識　援助を展開　→　追体験により，受持ちケースの思いを理解
←　看護ニーズを再認識

学生	受持ちケース	実習での排泄援助に関する学び		オムツ体験での学び（実施時期）
		実習記録Ｉより（記述時期）	ケースレポートより	
7	B		受持ちケースの動作，状況から掻痒感に気付く。 掻痒感に対する清潔ケアを実施する。	受持ちケースの掻痒感を理解する。(11)
8	D	排泄時のしぐさから，オムツ排泄の不快に気付く。(3)	個別の排泄サインをとらえ，適時オムツ交換に努めて不快を軽減する。	排泄時の不快感を理解する。 現状での個々の排泄状況に合っていない定時交換の問題を認識する。(11)
9	D	受持ちケースの状況，言動から掻痒感に対して清潔ケア等の援助の必要性を認識する。(2) 尿意便意のキャッチに努める。(4) ポータブルトイレ排泄を促す援助，ポータブルトイレで排泄するという意識をもたせる援助を展開する。(6)	受持ちケースの臀部掻痒感の原因を分析 掻痒感に対する援助， 尿意便意をつかみ，ポータブルトイレ排泄を促す援助の計画，実施，評価	受持ちケースの身になって不快感を理解する。 清潔ケアの必要性を再認識する。 オムツ排泄への慣れは，トイレ排泄への意識を失わせてしまうという問題を再認識する。(10)
10	G	排泄のサインを見過ごし，不快感を与えたことを反省する。(2) 動作から，オムツによる掻痒感，不快感に気付く。(4)	個別の排泄サインをつかむ。	受持ちケースの立場にたって不快感，苦痛を理解する。 現状での個々の排泄パターンに合っていない定時交換の問題点を認識する。(11)
11	G	受持ちケースの状況から，皮膚観察，清潔保持，感染予防の必要性を認識する。援助を展開。(3)	清潔保持の援助計画，実施，評価	蒸れ，皮膚への悪影響を認識する。排泄後の不快感を理解する。清潔保持の必要性を再認識する。(10)

表４－５　　パターン５

受持ちケースの状況，言動から 看護ニーズを認識　　援助を展開	→	追体験により受持ちケースの思いを理解 さらに新たな看護ニーズを認識

学生	受持ちケース	実習での排泄援助に関する学び		オムツ体験での学び（実施時期）
		実習記録Ｉより（記述時期）	ケースレポートより	
12	A	受持ちケースの言動から，掻痒感を知り，援助の必要性を認識する。(7) 受持ちケースのオムツ交換時の言葉から，介助されることの辛さを知る。(12) 現状での，個々の排泄状況に合っていない定時交換に対する戸惑い。(12)	掻痒感に対する援助展開	掻痒感，オムツ排泄への思いを理解する。 適時交換の必要性を認識する。(14)
13	D	受持ちケースの状況，言動から，臀部掻痒感，オムツの皮膚への影響を知り，援助の必要性を認識する。(3) 排泄サインをつかみ，適時交換に成功する。適時交換は，皮膚トラブル予防に有効と評価する。　(12，13)	掻痒感の原因を分析 掻痒感に対する援助の計画，実施，評価 排泄サインをつかむには，常に対象の側にいることが必要と認識する。	オムツ排泄による，臀部の汚染，不快感，掻痒感を実感する。 受持ちケースの立場にたって苦痛を理解する。 実習中のケアを反省。食事前にもオムツ交換をする必要性を認識する。(14)
14	D	受持ちケースの状況，言動からオムツによる掻痒感，皮膚トラブルに気付く。(2) 掻痒感，皮膚トラブルに対する援助の必要性を認識する。具体的援助の展開。(4，6) 排泄サインをつかみ，適時交換することにより皮膚トラブルの改善をねらう。(6)	掻痒感の原因を分析。 皮膚トラブルに対する援助の計画，実施，評価　（清潔保持のための援助，排泄サインをつかみ，適時交換するための援助） 排泄サインをつかめきれなかった。もっと，観察するべきだったと反省する。	オムツ排泄の不快感を実感する。 受持ちケースのおかれている状況を再認識する。痴呆老人の思いをつかむことの困難さ，その必要性を認識する。(14)

を感じつつも具体的な行動は展開できなかったが，オムツ体験により，個々に対応した適時交換の必要性があったという認識に至る。学生13は，受持ちケースの訴えや状況から，掻痒感やオムツの皮膚への影響を知り，援助を展開する。また，関わりの中で，腰を浮かせる動作やいきむ表情などが排泄のサインであると気付き，適時交換に成功する。オムツ体験により排泄物による汚染や，不快感，掻痒感を実感し，対象の状況を想定してその苦痛を考え，理解する。そして，実習を振り返り，オムツ交換を食後にしていたことを反省，相手の立場にたって援助することの必要性を認識する。学生14は，受持ちケースの訴えや状況から，掻痒感やオムツの皮膚への影響を知り，援助を展開する。適時交換につながるよう排泄サインのキャッチに努めるが，サインをつかめず，適時交換できなかったと反省。オムツ体験により，不快感を理解し，さらに,「老人は排泄してもすぐにオムツを交換することができない」,「老人は不快を表現することが困難な場合もある」と施設での対象の状況を振り返り，痴呆性老人の思いをつかむことの困難さ，その必要性の認識に至っている。

以上、まとめると14名の学生が，受持ちケースの感じている思い（不快感，掻痒感，羞恥心等）を自身の追体験で理解するに至っていた。オムツ体験学習から，受持ちケースの看護ニーズの把握に至った学生は，12名（パターン2，3，4，5）であった。具体的援助を展開した学生は10名（パターン3，4，5）であるが，そのうちオムツ体験学習によって把握した看護ニーズに対して援助を展開した学生は７名（パターン3，4）であった。具体的援助を展開したケースにおいて，適切な援助方法の選択，実施について，オムツ体験での学びとの関係を裏付ける記述はなかった。

４　考察

1）オムツ体験学習の実習の援助過程への影響

結果より，オムツ体験学習での学びは，対象理解，対象の看護ニーズの把握には影響しているといえる。しかし，援助展開（援助方法の選択，実施）への影響については言及できない。

2）オムツ体験学習での学びを対象への援助に活かしていくための方法

(1) オムツ体験学習の実施時期

援助の展開に至っているパターン3，4，5より考察する。パターン3は実習早期にオムツ体験を実施している。早期の体験学習により得られた，受持ちケースに対する理解が看護ニーズの把握につながり，その結果，尿意便意の確認や，トイレ排泄を積極的に促すなど具体的な援助展開に至ったと考えられる。パターン４と５は，体験学習をする前に既に受持ちケースの排泄に関する看護ニーズをとらえ，援助を展開している。パターン4の学生は，実習期間中にオムツ体験を実施。そこで追体験からさらに対象理解が深まり，看護ニーズの再認識をし，残りの実習期間において必要性を再認識した援助を継続していると考えられる。パターン５の学生は，オムツ体験を実習終了後に実施。追体験により，対象理解，看護ニーズの再認識がされるが，実習は終了しているため援助にさらなる展開はない。オムツ体験により，実習の中では，解決策を見出せずに戸惑いを感じていたことに対して，援助の方向性を見出すまでに至っている。また，オムツ体験で受持ちケースの状況を振り返り，痴呆性老人は思いをなかなか表現しにくいということ，ゆえに援助

者はその思いをキャッチすることに努めるべきという考えに至っている学生もいる。この学生は，ケースレポートに排泄サインをつかみきれなかったことを反省する記述をしている。オムツ体験で新たに問題を認識したにも拘わらず，それに対する具体策を展開することなく，反省で終わってしまうのは学生の学びとしては不充分感が残るであろう。

学生は，実習開始から第一週目は受持ちケースとの関係づくりや看護ニーズの把握に重点がおかれ，第二週目以降で看護ニーズに対しての具体的援助展開がされていく。実習一週目（対象に関する情報収集がまだ不充分で，看護ニーズの把握に努めている時期）にオムツ体験をしたパターン３の学生２人は，その体験からの学びが直接看護ニーズに反映されその後の援助展開につながっていったのではないだろうか。逆に，オムツ体験実施前に対象との関わりから，それぞれ看護ニーズをつかみ援助を展開している学生の場合，既に注目する援助内容が明確になってきており，実習後半でオムツ体験により排泄へのニーズをつかんだとしてもそれがレポートに記述されてこないという可能性は考えられる。

実習初日にオムツ体験をした学生は２人いたが，２人ともオムツ体験での学びと実習での学びとで関連する内容はなかった。実習初日は，まだ受持ちケースが決まっていない。そのような状況でのオムツ体験は，実際にオムツをつけている高齢者のイメージが具体化されておらず，実習中に実施した学生に多く見られたように，特定の個人の状況を想定して体験してみるということはされない。そのためオムツ体験での学びの内容が受持ちケースの状況と一致していなかったことから，関連した内容が得られなかったとも考えられる。

以上の点から，オムツ体験学習の時期として実習終了後は不適切といえる。また，体験で得られた学びをその後の援助に活かすためには，遅くとも第二週の中頃までに実施することが望ましいといえる。実習時期以前に体験学習を実施することについては，実習初日に体験学習を実施した学生２名の例からすると，教員による何らかの介入が必要であると思われる。

(2) 受持ちケース特性の影響

本実習での受持ちケース（表２）は，全員痴呆があり，H氏以外は，尿意便意の有無がはっきりせず，訴えもほとんどない。また，実習前半にはほとんどの学生が受持ちケースとのコミュニケーションに困難を感じている。

パターン４，５の学生は，オムツ体験実施前に排泄に関する援助を展開していたことから，体験学習実施に拘わらず排泄に関する看護ニーズをつかめていたといえる。パターン４，５の学生の受持ちケースについてみてみると，D氏は，臀部を中心として掻痒感が強く，皮膚に掻破痕も見られていた。普段は，車椅子に座って特に何かを訴えることもなく静かに，時には傾眠がちに過ごしていた。そんなD氏が唯一訴えることといえば掻痒感のことであり，学生にとっても，D氏の痒みの問題は，何とか軽減したいものであり，それはオムツが一因で引き起こされていると気付いて以降は，自然と掻痒感，皮膚へのケアニーズの認識に発展し，援助を展開できていたといえる。対象A，Bもオムツ使用による掻痒感があり，掻痒感を軽減するための援助の一部として排泄援助がされている。対象Gは，掻痒感の表出に加え，膀胱カテーテル留置中であり，感染予防の観点からも排泄ケアの大切さは認識されやすいと思われる。

痴呆性老人の場合，痴呆の進行とともに言語的手段で自身の苦痛や訴えを適切に表現することは困難になってくるが，痒い部分を掻くというような簡単な動作は痴呆が進んでも遅くまで表現される動作といえる。また，皮膚のかぶれ，掻破痕などは客観的情報として得られ，看護ニーズに直結しやすい。よって，受持ちケースの掻痒感や皮膚のトラブルについては，学生が看護ニーズとしてとらえやすい問題であるといえる。

以上より，排泄に関して看護ニーズとしてあがりやすく，オムツ体験での学びが援助につながりやすいのは，臀部に掻痒感のあるケース，膀胱カテーテル留置など清潔ケアがより求められるケースであるといえる。

(3) 指導者の介入方法

オムツ体験学習での学びは，対象理解，対象の看護ニーズの把握には影響しており，援助の動機付けになっていた。しかし，直接の援助展開－適切な援助方法の選択，実施－に結びついていた学生は少なく，教員の意図的な介入が必要であることが示唆された。体験学習での学生の気付きが，気付きにとどまらず具体的援助に発展するよう，学生の気付きや思いを尊重しながら援助の方向性を示すこと，具体的方法を探る手助けをすることが必要といえる。また，痴呆性老人の場合，掻痒感や不快感など表現されやすい感情は，看護ニーズに直結しやすいが，羞恥心や自尊感情といった表現されにくい感情は表面化しにくく，看護ニーズとして捉えにくいといえる。学生１と２は，対象のしぐさや表情から羞恥心を察知し，オムツ体験によりその羞恥心や自尊心をそがれる苦痛についての理解をしている。痴呆性老人のわずかな表情の変化やしぐさを，何かを訴えようとしているサインであると探っていく視点，気付きは援助する上で非常に重要である。オムツ体験をとおして学生自身が様々な感情を体験することはそういった気付きにつながると考えられるので，体験学習で学生が感じたこと学んだことを引き出しながら，それを目の前の援助対象者と重ね合わせて看護ニーズの気付き，さらに援助に結びつけるような指導者の関わりが必要だといえる。

5　本研究の限界と今後の課題

本研究では，実習記録やケースレポート，オムツ体験レポートといった記録物に記述された内容を学生の学びとしてとらえ，教育効果を評価した。しかし，記録物には学生が特に注目している内容について記述される傾向があり，記述のない学生の学びについては言及することができない。また，実習での学びは学生と受持ちケースの二者間だけでなく，指導する教員や現場スタッフの介入も影響している要因と考えられるため，今後教員やス

タッフの介入についても分析を加え教育効果を評価していく必要がある。

6 参考文献

1）松村三千子，井沢陽子（2000）老人看護学授業展開の工夫．看護教育，41（5）
2）高崎絹子（1992）老人看護の“難しさ”の考察．クリニカルスタディ，13（2）
3）鳴海喜代子（1993）老人看護学における教育方法の検討．帝京平成短期大学紀要第3号．
4）中村弥生，堀井たづ子，光木幸子（1994）老人看護を考えるための体験学習．京都府立医科大学医療技術短期大学部紀要，4.
5）足立みゆき，宮脇美保子（1997）看護学生のおむつ着用による体験学習に関する研究．鳥取大学医療技術短期大学部紀要第26号．
6）出野慶子，小林貴子，茂野香おる，須釜真由美（1997）基礎看護技術における教育方法の検討，千葉県立衛生短期大学紀要第16巻第２号．

Abstract

The analysis of the learning by urinating experience using diaper in Gerontological nursing practicum

Yoko KOBAYASHI

For the students to understand the elderly people better, we have added the task in which the students experience urinating using diapers to the practicum program. The purpose of this study is to clarify the relationship between learning by the experience urinating using diapers and learning by the practicum. I analyzed and examined the reports of 25 students. Students with the content, which was similar to learning by the experience and learning by the practicum, were the 14 persons, and it was able to classify the relationship between 2 kinds of learning into 5 patterns. Execution time of the experience and characteristics of charge resident in the practicum affected the relation of that learning. I got the suggestion that intentional intervention of the teacher was necessary so that care for resident may be made to reflect the learning of the experience.